

地域の持続可能性と地域アーカイブとしての産業遺産の保存

研究員 上代庸平



SDGsでは、都市の持続可能性の要素として「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」(ターゲット 11.4)ことを挙げていますが、特にある都市地域における文化遺産は、その地域の産業・経済・文化教育・生活等の様々な面で、地域の発展と変化、そして現在の都市地域のかたちそのものに大きな影響を与えています。

常磐炭田(現在のいわき市)は、東京圏に最も近距離に位置する鉱工業地域として繁栄してきました。坑内の鉱泉湧出量が多く、更に炭層厚や炭質にも優れないという不利な条件でしたが、様々な技術の投入や人々の努力により、約1世紀に渡り京浜地域に燃料炭を供給してきた地域です。

現在の同地域は、炭鉱閉山後、炭鉱から豊富に湧出する温泉を利用する形で開設されたスパリゾートハワイアンズ(開業当初は常磐ハワイアンセンター)を中心として炭鉱閉山後の転換産業の立ち上げに成功し、観光産業やそれに関連する諸事業が現在の地域とそこで暮らす人々の暮らしを支えています。転換産業の立ち上げの過程を描く映画「フラガール」や、10年前の東日本大

震災からの地域の復興の象徴となったフラガールたちの笑顔は広く知られています。

炭鉱産業については、人々の記憶や記録も風化しつつあるものの、不利な採掘条件を反転するために独自の水中貯炭槽や坑内冷却の仕組みを考案し具体化してきた先人の歩みや、その周辺の鉱山街の暮らしの様子の記録は、我が国の産業史の1頁として極めて価値の高いものです。現在の同地域を支える観光産業と港湾産業はいずれも炭鉱にルーツを有しており、現在の地域の発展の必然性は、炭鉱を抜きにしては語る事ができません。その意味で、炭鉱の記憶はまさに同地域の持続可能性の核心と言えます。同地域において、新型コロナウイルス禍や世代交代の波の中で懸命に続けられている、産業遺産の保存・伝承活動の様子から、産業遺産の保存や利活用について考察を深めていきたいと考えています。



旧住吉一坑・扇風機上屋内部には、坑内空気を排気するための扇風機がはめ込まれていた円形台座が残る。老朽化が進行しており、事前許可を得て常磐炭鉱史研究会関係者同伴でなければ見学不可であるが、かつての鉱山技術の貴重な遺構であり、保存とさらなる利活用の両立が課題である。(2020年12月9日撮影)